

短編集

猫パン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

びっくりしない寝た保管箱。

取り敢えず思い付いた話を投下していく。

面白くなくても。

目次

インフィニット（IF）ストラトス

IS 幼女が来たら（笑）

1

原作 千冬サイド

5

インフイニツト（I F）ストラトス

I S 幼女が来たら（笑）

「全員揃ってるみたいですねー。それでは、S H Rを始めますよー」

黒板の前で微笑む副担任。

名前は山田真耶。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね。」

「……………」

挨拶むなしく教室中変な空気である一点を見ている。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で。」

そう言つて自己紹介が進んでいくが、回りは一点を見ている。

世界初のイレギュラー。織斑一夏の席を。

「織斑君？織斑一夏くん？あれ？居ないのかな？」

惜しきかな山田先生。

居ない訳ではなく、ただ見落としているだけだ。

「何処を見ている、山田教諭。私は一時間前から此処に居るぞ。」

そう答えたのは世界発の男性操縦者が座るはずの席。

そこに座っていた、白で統一された服を着た黒髪ロングの幼女であった。

ただ一つの違和感としては、声が太いのである。

「え!?で、でも……」

「姿形など、何の意味もなさない。ただそれだけの事だ。」

そう言いながら席を立ち、教壇へと上がる一夏。

若干目が紅に染まっていたが、誰も気付かない。

「さて。淑女諸君、改めて言っておこう。」

私が織斑一夏だ。以後よろしく。

外見はこんななりだが、れっきとした男なので安心すると良い。ああ、あと。

どんな時間でも私の机に乗っているティーセットにだけは触れぬように。」

そう言うと、パタパタとはためいてるマントに見えるコートを翻し席へと着いた。

一夏が席に着くと同時にドアが開き、女性が一人入ってくる。

「あ、織斑先生。会議は終わりましたか?」

「ああ、山田先生。クラスへの挨拶、押し付けてすまなかつたな。」

「いえいえ、副担任ですから。」

入って来たのは教師。

名は織斑千冬、先程自己紹介した幼女^{男性}……織斑一夏の実姉である。

「諸君、私が織斑千冬だ。お前達新人を一年で、使い物になる操縦者に育て上げるのが仕事であり義務だ。故にお前達は私の言うことをよく聞き、そして理解しろ。出来ない者は出来るまで、わからない者はわかるまで指導してやる。私に逆らってもいいが、以後失敗したくないのなら私の言うことは聞け。いいな？」

教師としての言葉ではないのだ、明らかに軍部を指導する鬼教官の言葉である。
なのだが……クラスは違う意味でざわついていた。

「キャー……本物の千冬様よ！」

「千冬様にご指導していただけるなんて！」

等、黄色い悲鳴で満たされる。

「はあ……嬉しいのは分かるが、あまり浮かれすぎるとなよ？」

さて……これでSHRを終わりとする。
この後すぐに授業に入るのにな、準備を怠らないよう。」

原作 千冬サイド

今日は私の中で最悪の1日かもしれない、そう思えば気が楽になる。

今日から新しいクラスを持つと言うのに、何故こう面倒事ばかり重なるのだろう。

世界初だからか知らんがここまで書類が要るのだろうか。心なしか、そう思っていた私の歩く速度が落ちてきている気がした。

『……r斑一夏です。……以上です。』

そのふざけた紹介を聞いた私は、手に持った出席簿を握り締め……教壇で突っ立っている馬鹿を叩くことにした。



スパンツ！

「いつ!?!」

叩かれた男子生徒は、恐る恐るといった風に振り返る。

「ゲツ、関羽!」

バンツ!!

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者が。」

叩いた張本人である女教師は、低めのトーンで落ち着いているため恐怖心を駆り立てる。

「あ、織斑先生。会議は終わりましたか?」

「ああ。山田先生、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな。」

先ほどとはうって変わって高めのトーンで口を開く。

「い、いえ。副担任ですから、これくらいは……」

若干声を潤ませ、頬を紅くしながら言う。

これに対し、若干の溜め息を吐きながら口を開く。

「諸君、私が織斑千冬だ。お前達新人を一年で使い物になる操縦者に育て上げる、それが仕事であり義務だ。故にお前達は私の言うことをよく聞き、そして理解しろ。出来ない者は出来るまで、わからない者はわかるまで指導してやる。私に逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな？」

女教師……否、千冬の言葉にクラス中の女子が悲鳴をあげる。
頬を染めて。

「キャーキャー本物の千冬様よ！」

「千冬様にご指導していただけるなんて！」

等、黄色い悲鳴で満たされる。

耳をつんざくような声に、少しガラスが震えていたが……然したる問題ではないだろう。

「はあ、毎年毎年よくもこれだけの馬鹿を集めたものだ。……これだけは馴れないものだな、私も。」

悪態を付きつつ、頭を抱える千冬。

端から見れば本当に鬱陶しそうにしている。

だが……

「御姉様!!もつと叱つて、そして罵ってください!!!」

「でも時には優しく!」

「そしてつけ上がらないように躰を!!」

彼女達にとつて苦ではなく、千冬にとつては苦になる事に。

実際千冬に耳があつたら、タレ千冬になっているだろう。

「……馬鹿者共がこうも集まる。感心させられるが、何故私のクラスだけ多いのだ?ここだけに集中させているのか?」

若干不満げに、誰にも聞こえないような声量で愚痴を溢す。

そして意を決したように向き直ると、先ほどから突つ立っている男子生徒にこう言い放つ。

「で? 挨拶もろくにできんのか?お前は。」

「いや、千冬姉……俺はー」

ズバンツ!!!

「ここは学舎、そして私は教師だ。故に織斑先生と呼べ。」

「……はい、織斑先生。」

このやり取りが切っ掛けか、回りがざわつき始める。

「え?……織斑君って、あの千冬様の弟?」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるのもそれが関係して……」

「ああつ、いいなあ。変わってほしいなあ……」

等々、ちらほらと男子生徒……織斑一夏と織斑千冬の関係性がわかっていく。

そんななか、心底面倒臭そうに溜め息を吐く千冬。

「はあ……さて、シヨートホームルームS H Rは終わりだ。諸君らにはこれから、ISの基礎知識を半月で

覚えてもらう。その後の実習では、基本動作を残り半月で覚えてもらう。いいな?」

「はい!!!」

鋭い眼光で見渡すと、その場全員（山田先生含む）が一斉に返事をした。